

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年10月17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 修士2年

氏 名 廣 瀬 恵理奈

助 成 の 種 類	平成26年度・研究者交流支援・在外研究短期助成		
研 究 課 題 名	ブルトン語における前置詞aの人称形の代名詞的用法		
受 入 機 関	国際連合教育科学文化機関(UNESCO)		
渡 航 期 間	平成26年8月15日 ～ 平成26年9月20日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	507,000円	
	使用した助成金額	507,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	往復航空券	176,600円
		滞在費	280,140円
現地研修参加費		50,260円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

報告者は2014年8月15日から9月20日までフランスブルターニュ地方およびパリに滞在し、ブルトン語の前置詞 a 活用形に関する話者への調査と資料収集活動を行った。以下はその成果の概要である。

1. 目的

ブルトン語の前置詞 a 活用形（前置詞 a と人称接尾辞の融合形）は、もともとの分格や奪格の意味のみを表していたが、17世紀ごろから意味のずれが始まり徐々に対格の意味を表すようになった（Favereau 1997: 427）。また、自動詞の主語としての用法についても指摘されている（Favereau 1997: 427, Press 2009: 479, Stephens 1993: 372）。今回の派遣では、このような前置詞 a 活用形の代名詞的な使われ方について母語話者を対象に調査を行い、旧来の人称代名詞との関係を調べるものである。

2. 方法

ブレスト、カレ、バダン、レンヌの4地点とその周辺の自治体で母語話者やブルトン語で生活や仕事をしている非母語話者を対象に調査票を用いた前置詞 a 活用形の代名詞的用法の文法調査と、母語話者を対象に自由談話の収集を行った。

3. 調査結果

以下に示すのは派遣中に現地で行った前置詞 a 活用形の自動詞主語としての用法に関するインフォーマント調査の一部である。ブルトン語母語話者7人に例文を提示し、その文に対するインフォーマントの容認度を5段階（1：よく使う、2：少し使う、3：使わない、4：非文法的、5：提示された表現を理解できない）でランク付けしたものである。インフォーマントA～Cはケルネウ（コロヌアイユ）方言、Dはレオン方言、E～Gはトレゲル（トレギエ）方言の話者である。ここで例示する例文はそれぞれ自動詞 dont 「来る」の完了相の否定文と肯定文、他動詞 lazhañ 「殺される」の受動態の否定文と肯定文である。

自動詞 dont 「来る」：否定

- (1) Ne zeu ket anezhi.
 NEG come NEG of.3SG.f

「彼女は来ない。」

A	B	C	D	E	F	G
1	1	1	4	4	2	3

自動詞 dont 「来る」の完了相：肯定

- (2) Deuet eo anezhi.
come.PP COP of.3SG.f
「彼女が来た。」

A	B	C	D	E	F	G
4	1	3	4	4	2	3

自動詞 dont 「来る」の完了相について、否定文では1の評価だったインフォーマント A・C の評価が肯定文では4と3であり、肯定文での前置詞 a 活用形による主語標示は容認度が低いと言える。

受け身文：否定

- (3) N' eo ket lazhet anezhañ.
NEG COP NEG killed.PP of.3SG.m
「彼は殺されなかった。」

A	B	C	D	E	F	G
1	1	1	4	4	2	3

受け身文：肯定

- (4) Lazhet eo bet anezhañ.
killed.PP COP been.PP of.3SG.m
「彼は殺されてしまった。」

A	B	C	D	E	F	G
4	1	4	4	4	4	4

他動詞 lazhañ 「殺す」の受動態の場合は肯定文の容認度が否定文と比べて大幅に低いと言える。しかし、インフォーマント B はいずれの例文にも容認度が高い。

4. 分析・結論

調査より、否定文と比べて肯定文の用法が話者に受け入れられにくいことがわかった。話者のうちでもケルネウ方言話者はすべての否定文で高い容認度を示した。一方で、インフォーマント D (レオン方言話者) と E (トレゲル方言話者) いくつかの例文にも非文法的との判断をく

でした。非母語話者のほかのレオン方言話者へ行った同様の調査でも明らかだったように、特にレオン方言話者は前置詞 a 活用形の自動詞主語としての用法は受け入れられないようであった。また、インフォーマント E (トレゲル方言) の結果からトレゲル方言でも前置詞 a 活用形は容認しにくいようであったが、同じくトレゲル方言のインフォーマント F・G の評価は 1 (容認度が最も高い評価) ではなかったものの決して非文法的であるとは評価しなかった。この原因としてインフォーマント F は母親がケルネウ方言話者であり、インフォーマント G はケルネウ方言話者との交流が日常的にあるなど、言語外的要因があると考えられる。

この調査結果はブルトン語の方言差が代名詞体系に関わるほどの大きなものであることを証明し、インフォーマント F・G のような複数の方言を知る話者の言語の捉え方を知る社会言語学的な資料になることが期待される。また、派遣期間中に行った母語話者による談話音声の収録は、言語そのものだけでなくブルターニュ文化や農村の人々の暮らしの一部分を切り取るものであり、文化的にささやかながら貢献することができた。

最後ではあるが、このような調査の機会を与えてくれた京都大学教育・研究振興財団に篤く感謝申し上げる。